

外套・鼻

ゴーゴリ作

平井 肇 訳



ある日、鼻が顔から抜け出してひとり歩きを始めた…写実主義的筆致で描かれる奇妙きれつなナンセンス譚『鼻』。運命と人に辱められる一

人の貧しき下級官吏への限りなき憐憫の情に満ちた『外套』。ゴーゴリ(1809-1852)の名翻訳者として知られる平井肇(1896-1946)の訳文は、ゴーゴリの魅力を伝えてやまない。



赤 605-3
岩波文庫

がいとう はな
外套・鼻 ゴーゴリ作

1938 年 1 月 20 日 第 1 刷発行
2006 年 2 月 16 日 改版第 1 刷発行

訳 者 ひら い はじめ
平井 肇

発行者 山口昭男

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

案内 03-5210-4000 販売部 03-5210-4111
文庫編集部 03-5210-4051
<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷・精興社 製本・桂川製本

ISBN 4-00-326053-8

Printed in Japan

江苏工业学院图书馆

外藏 套书 章



岩波書店

Николай Васильевич Гоголь

Шинель

Нос

目 次

鼻		七
外 套		五
訳 注		一五
解 題(平井肇)		一三
あとがき(横田瑞穂)		一九

外 套

或る省の或る局に……併し何局とはつきり言わない方がいいだろう。おしなべて官房とか聯隊とか事務局とか、一口にいえば、あらゆる役人階級ほど怒りっぽいものはないからである。今日では総じて自分一個が侮辱されても、なんぞやその社会全体が侮辱されでもしたように思いこむ癖がある。つい最近にも、どこの市だったか睨とは憶えていないが、さる警察署長から上申書が提出されて、その中には、国家の威令が危殆に瀕していること、警察署長という神聖な肩書が無闇に濫用されていること等が明記されていたそうである。しかも、その証拠だと言って、件の上申書には一篇の小説めいた甚く彫大な述作が添えてあり、その十頁ごとに警察署長が登場するばかりか、ところに依つては、へべれけに泥酔した姿を現わしているとのことである。そんな次第で、いろんな面白からぬことを避けるためには、便宜上この問題の局を、ただ《ある局》と言うだけにとどめておくに如くはないだろう。さて、その或る局に、《一人の官吏》が勤めていた——官吏、と言ったところで、大して立派な役柄の者ではなかった。背丈がちんちくり

んで、顔には薄痘痕うすあばたがあり、髪の毛は赤ちゃけ、それに眼がしよぼしよぼしていて、額ひたいがすこし禿はげあがり、頬の両側には小皺こじわが寄つて、どうもその顔いろは所謂痔いづるもちらしい……しかし、これはどうも仕方がない！ 罪はペテルブルグの氣候にあるのだから。官等に至つては（それというのも、我が国では何はさて、官等を第一に御披露しなければならぬからであるが）、いわゆる万年九等官という奴で、これは知つての通り噛かみつくことも出来ない相手をやりこめるといふ誠に結構な習慣を持つ凡百の文士連から存分に愚弄ぐろうされたり、ひやかされたりしてきた官等である。この官吏の姓はバシマチキンと言つた。この名前そのものから、それが短靴バシマクに由来するものであることは明らかであるが、しかし何時いつ、如何いかなる時代に、どんな風にして、その姓が短靴バシマクという言葉から出たものか——それは皆目わからない。父も祖父も、剩あまつさえ義兄弟まで、つまりバシマチキン一族のものといえは皆が皆ひとり残らず長靴を用いており、底革は年にほんの三度ぐらいしか張り替えなかつた。彼の名はアカーキイ・アカーキエヴィツチと言つた。或はあるいは、読者はこの名前をいささか奇妙な故意わざとらしいものに思われるかもしれないが、しかしこの名前は決して殊さら選えり好んだものではなく、どうしてもこうよりほかに名前のつけようがなかつた事情が、自然とそこに生じたからだと言ふことが出来る。つまり、

それはこういう訳である。アカーキイ・アカーキエヴィツチは私の記憶にして間違えなければ、三月二十三日の深更に生まれた。今は亡き、そのお袋というのは官吏の細君で、ひどく氣だての優しい女であつたが、然るべく赤ん坊に洗礼を施そうと考えた。お袋はまだ戸口に向かいあつた寝台に臥ふせつており、その右手にはイワン・イワーノヴィツチ・エローシキンといつて、当時元老院の古参事務官であつた、この上もなく立派な人物が教父として控えており、また教母としては区の警察署長の細君で、アリーナ・セミョーノヴナ・ビエロヴリユーシコワという、世にも稀めづらしい善良温雅な婦人が佇たたずんでいた。そこで産婦に向かつて、モークイとするか、ソツシイとするか、それとも殉教者ホザザートの名に因ちなんで命名するか、兎とに角この三つのうちどれか好きな名前を選ぶようにと申し出た。『まあ厭いやだ』と、今は亡きその女は考えた。『変な名前ばかりだわ。』で、人々は彼女の氣に入るようにと、曆*の別の箇所をめくつた。すると又もや三つの名前が出た。トリフィーリイに、ドウーラに、ワラハーシイというのである。『まあ、これこそ天罰だわ!』と、あの婆さんは言つたものだ。『どれもこれも、みんな何という名前でしょう! わたしや、ほんとうにそんな名前つて、ついぞ聞いたこともありませんよ、ワラダートとか、ワルーフとでもいうのならまだしも、トリフィーリイだのワラ

「ハーシイだなんて！」そこでまた曆の頁をめくると、今度はパフシカーヒイにワフチーシイというのが出た。『ああ、もう分かりました！』と、婆さんは言った。『これが、この子の運命なんでしょうよ。そんな位なら、いつそのこと、この子の父親の名前を取つてつけた方がましですわ。父親はアカーキイでしたから、息子もやはりアカーキイにしておきましょう。』こんな風にしてアカーキイ・アカーキエヴィツチという名前は出来あがつたのである。そこで赤ん坊は洗礼を受けたが、その時彼はわっと泣き出して、あたかも将来九等官になることを予感でもしたような顰めつ面をした。要するに事のおこりは凡てこんな具合であつたのである。こんなことをくだくだしく並べたのも、これが万已むを得ぬ事情から生じたことで、どうしても他には名前のつけようがなかったといういきさつを、読者にとくと了解していただきたい為^{ため}に他ならないのである。いつ、どういう時に、彼が官庁に入ったのか、また何人^{なんびと}が彼を任命したのか、その点については誰ひとり記憶している者がなかった。局長や、もろもろの課長連が幾人^{いくにん}となく更迭^{こうてつ}しても、彼は相も変わらず同じ席で、同じ地位で、同じ役柄の、十年一日の如^{ごと}き文書係を勤めていたので、しまいには皆んなが、てつきりこの男はちゃんと制服を身につけ、禿げ頭を振りかざして、すっかり用意をしてこの世へ生まれて来たものに違いないと思ひ込ん

でしまったほどである。役所では、彼に対しては少しの尊敬も払われなかった。彼が傍を通っても守衛たちは起立するどころか、玄関をたかだか蠅でも飛び過ぎた位にしか思わず、彼の方を振り向いて見ようとしなかった。課長連は彼に対して妙に冷やかな圧制的な態度を取った。或る副課長の如きは、『清書して呉れ給え』とか、『こいつはなかなか面白い、一寸いい書類だよ』とか、又は凡そ礼儀正しい勤め人の間で普通に取り交わされている何かちよつとしたお愛想ひとつ言うでもなく、いきなり彼の鼻先へ書類をつきつけるのであった。すると、彼はちらと書類の方を見るだけで、一体誰がそれを差し出したのやら、相手に果してそうする権利があるのやら、そんなことには一向頓着なく、それを受け取る。受け取ると、早速その書類の写しに取りかかったものである。若い官吏どもは、その属僚的な駄洒落の限りを尽くして彼をからかったり冷かしたり、彼のいる前で彼についての色んな出鱈目な作り話をしたものである。彼のいる下宿の主婦で七十にもなる老婆の話を持ち出して、その婆さんが彼をいつも殴つのだと言ったり、お二人の婚礼は何時ですかと訊ねたり、雪だといって、彼の頭へ紙きれを振りかけたりなどもした。しかしアカーキイ・アカーキエヴィツチは、まるで自分の眼の前には誰ひとりいないもののように、そんなことにはうんともすんとも口応え一つしなかった。こ

んなことは彼の執務には一向さしつかえなかったのである。そうしたいろんなうるさい邪魔をされながらも、彼はただの一つも書類に書き損ないをしなかった。ただ余り悪戯(いたづら)が過ぎたり、仕事をさせまいとして肘(ひじ)を突ついたりされる時にだけ、彼は初めて口を開くのである。『構わないで下さい！ 何だつてそんなに人を馬鹿にするんです？』それにしても、彼の言葉とその音声とは、一種異様な響きがあつた。それには、何かしら人の心に訴えるものがこもっていたので、つい近ごろ任命されたばかりの一人の若い男などは、見様見真似(みようみまね)で、ふと彼を揶揄(からか)おうとしかけたけれど、と胸を突かれたように、急にそれを中止したほどで、それ以来この若者の眼には、あだかも凡てが一変して、前とは全然別なものに見えるようになったくらいである。彼がそれまで如才のない世慣れた人たちだと思つて交際していた同僚たちから、或る超自然的な力が彼を押し隔ててしまった。それから長いあいだというもの、極めて愉快な時にさえも、あの『構わないで下さい！ 何だつてそう人を馬鹿にするんです？』と、胸に滲(し)み入るような音(おと)をあげた、額の禿(かぶ)げあがつた、ちんちくりんな官吏の姿が想い出されてならなかった。しかもその胸に滲み入るような言葉の中から、『わたしだつて君の同胞なんだよ』という別な言葉が響いて来た。で、哀れなこの若者は思わず顔を蔽(おほ)った。その後ながい生涯の間にも幾

度となく、人間の内心には如何に多くの薄情なものがあり、洗練された教養ある如才なさの中に、而も、ああ！世間で上品な清廉の士と見做されているような人間の内部にすら、如何に多くの兇惡な野性が潜んでいるかを見て、彼は戦慄を禁じ得なかったものである。

こんなに自分の職務を後生大事に生きて来た人間が果してどこにあるだろうか。熱心に勤めていたと言うだけでは言い足りない。それどころか、彼は勤務に熱愛をもっていたのである。彼にはこの写字という仕事の中に、千変万化の、愉しい一種の世界が見えていたのである。彼の顔には、いつも悦びの色が浮かんでいた。ある種の文字に至っては非常なお気に入り、そういう文字に出喰わすという、もう我れを忘れてしまい、にやにや笑ったり胸せをしたり、おまけに唇までも手伝いに引っぱり出すので、その顔さえ見ていれば、彼のペンが書き表わしているあらゆる文字を一々読みとることも出来そうであつた。若しも彼の精励恪勤に相応した報酬が与えられたとしたら、彼自身は吃驚仰天したことであらうけれど、恐らく五等官には補せられていたに違いない。ところが当の彼が贏ち得たところのものは、他ならぬ己れの同僚たち口性ない連中の言い草ではないが、胸には鉸具、腰には痔疾に過ぎなかつた。とはいえ、彼に対して何の注意

も払われなかったと言う訳ではない。或る長官は親切な人間で、彼の永年の精励に酬い
んがためにありきたりの写字よりは何かもう少し意義のある仕事をさせるようにと命じ
た。そこで、既に作製ずみの書類の中から、他の役所へ送るための一つの報告書をつく
る仕事が彼に命ぜられたのである。それは単に表題を書き改めて、ところどころ、動詞
を一人称から三人称に置き換えるだけの仕事であつた。ところが、彼にはそれが以ての
他の大仕事で、すっかり汗だくになり、額を拭き拭き、とうとうしまいには、『いや、
これよりわたしにはやっぱり何か写しものをさせて下さい』と悲鳴をあげてしまった。
で、彼はずっとその時以来、相も変らぬ筆生として残されたのである。どうやら彼には
この写しもの以外には何ひとつ仕事がなかつたものようである。彼は自分の服装のこ
となどはまるで心にも留めなかつた。彼の著ている制服といえば、緑色が褪せて変な
人参に黴が生えたような色をしていた。それに襟が狭くて低かつたため、彼の頸はそれ
ほど長い方ではなかつたけれど、襟からにゆうと抜け出して、例の外国人を気取った口
シア人が幾十となく頭にのせて売り歩く、あの石膏細工の首振り猫のように、おそろし
く長く見えた。それにまた、彼の制服には、いつもきまつて、何なりかなり、乾草の切
れっぱしとか糸くずといったものがこびり附いていた。おまけに彼は街を歩くのに、ち

ようと窓先からいろんな芥屑ごみくたを投げすてる時を見計らつて、その下を通るといふ妙な癖があつた。そのために、彼の帽子にはいつも、パン屑くずだの、甜瓜まくわうりの皮だのといった、いろんなくだらしないものが引つかかつていた。彼は生まれてこの方ただの一度も、日々、街中で繰り返されてゐる出来事などには注意を向けたこともなかつたが、知つてのとおり、彼の同僚の年若い官吏などは、向こう側の歩道を歩いている人がズボンの裾すその止め紐ひもを綻ほころばしてゐるのさえ見遁みのがさないくらい眼が敏はやくて、そういったものを見つけると、いつもその顔に狡ずるい薄笑いを浮かべたものである。しかし、アカーキイ・アカーキエヴィッチは何を見たとしても、彼の眼には、そうしたものの上に、なだらかな筆蹟で書きあげられた自筆の文字より他には映らなかつたのである。で、若し、どこからとも知れず、にゅつとばかりに馬の鼻面はなづらが彼の肩の上へのしかかつて、その鼻孔から彼の頬にふうつと一陣の風でも吹きつけない限り彼は自分が書き物の行の中にゐるのではなくて、往来の真ん中にゐるのだとは気がつかかなかつたであらう。彼は家へ帰ると早速、食卓に就き、大急ぎでおきまりの甘藍汁シチイをすすり、玉葱たまねぎを添えた一切れの牛肉を平らげるが、味加減などには一切無頓着で、蠅であらうが何であらうが、その際食物に附着している物と一緒に食つてしまうのである。胃囊いぶくろがくちくなりはじめたなと気がつく、彼は食